

## 77 「漢字と日本人」

「キシヤのキシヤ、キシヤでキシヤ」

音がおなじでも文字がちがえば別、というのが、日本人にとっては、わざわざ言うまでもない当然のことなのである。だから、いくら同音の語ができて平気なのだ。むしろそれをたのしんでいる。まぎらわしい同音の語がふえるのをたのしんでいるかのようである。

言葉に関することに興味を持っている。これまでに 39 「言葉と思考」、49 「言葉と文字」で言葉と文化について書いた。

「漢字と日本人」は高島俊男氏の著書、書店で偶然見つけて読み始めたが、とても興味深い内容だったので紹介したい。文中『斜体』で示した文は、この本からそのままの引用、それ以外は自作の文章、または本の内容をアレンジしたものである。

高島氏は中国語学、中国文学の研究者である。かなり前になるが「お言葉ですが…」という本を読んだことがあった、というのを「漢字と日本人」を読み終わった後に気付いた。私が読んだのは、週刊文春の連載を単行本化したものだった。この著者の特徴は、文章の面白さと知識の深さ、そして編集者と対話するような、読者へ問いかけるような文章が随所に現れるところだ。

『キシヤのキシヤ、キシヤでキシヤ』は漢字で書けば「貴社の記者、汽車で帰社」となることは少し考えれば分かる。これは日本語の特徴の一つを表している。

ここから本論、

『みなさんがたのなかには、文字のないことばなんてずいぶん不備なもののように思う人があられるかもしれないけれど、それはとんだ考えまちがいです。いま地球上には四千ぐらいの言語があって話されているようだが、文字体系が四千もあるはずがない。文字をとまわらない言語のほうが多いのです。まして千数百年も前には、文字を持ったことばというのが特殊な例外であった。』

日本に言葉はあったが、それを表記する文字はなかった。そこに中国から漢字が入ってきた。漢字は漢族の言葉（漢語：黄河下流域に住んでいた人々の言葉）で用いられている文字である。

『つまり「漢族」という人種があり、その言語が「漢語」であり、その漢語を表記する文字が「漢字」である。漢語という言語がいつからあるのかはわからない。ともかく何千年もの大昔からある。それを書きあらわす漢字がいつできたのかもわからないが、三千年以上前からあることはたしかである。

日本にはいつてきたのが千数百年前だから、それまでにすでに二千年ぐらいの歴史がある。したがって非常に発達した、整備された文字体系になっていた。それが日本にはいつてきた。』

漢語と日本語は全く別々に生まれた言語で、使っている文字は同じでも言語の系統は異なり、性格が全く違っている。

『日本が中国から漢字をもらったことをもって、恩恵を受けた、すなわち日本語にとって幸運なことであつたと考える人があられるが、それもまちがいである。それは、日本語にとって不幸なことであつた。

なぜ不幸であつたか。第一に、日本語の発達がとまってしまった。当時の日本語はまだ幼稚な段階に

あった。たとえば、具体的なものをさすことばはあったが、抽象的なものをさすことばはまだほとんどなかった。個別のものをさすことばはあったが、概括することばはなかった。

それはこういうことだ。「雨」とか「雪」とか「風」とか、あるいは「あつい」とか「さむい」とかの、目に見え体で感じるものをさす、あるいは身体的な感覚をあらわすことばはある。しかし「天候」とか「気象」とかの、それらを概括する抽象的なことばはない。』

『あるいは目に見える「そら」はある。しかし万物を主宰し、運行せしめ、個人と集団の命運をさだめる抽象的な「天」はない。いやこの「天」ともなると、単に抽象的というにとどまらず、この観念を生んだ種族の思想—すなわちものの考えかた、世界と人間とのとらえかたを濃厚にふくんでいる。

概念があるからことばがある。逆に言えば、ことばがないということば概念がないということである。理、義、恩、智、学、礼、孝、信、徳、仁、聖、賢……、これらはみな抽象的な概念である。目に見え手でつかめるものではない。これらに相当する日本語はなかった。ということは、そういう概念がなかったということである。日本語は、みずからのなかにまだ概括的な語や抽象的なものをさす語を持つにいたっていない段階にあった。日本語が自然に育ったならば、そうしたことばもおいおいにできてきたであろう。しかし漢字がはいってきた……それはとりもおさず日本語よりもはるかに高い発達段階にある漢語がはいってきたということだ……ために、それらについては、直接漢語をもちいるようになった。日本語は、みずからのなかにあたらしいことばを生み出してゆく能力をうしなった。

高度な概念をあらわす漢語は、かならずしも人類普遍のものではない。かならずしも日本人の生活や思想（ものの考えかた）、感情、気分適合したものではない。「季節」とか「気象」とかは人類普遍と言ってよいだろう。いわば無色の抽象語である。しかし、「天」はもとより、「理」にせよ「義」にせよ、あるいは「徳」にせよ「賢」にせよ、これらはみな中国人（漢族、支那人）の生活のなかからうまれてきた抽象的な概念である。支那思想そのものである。日本人は、自分たちの生活や感覚のなかからうまれたものではない、それらの概念をそのままうけいれざるを得なかった。

日本語が漢語の浸蝕を受けなければ、「理」や「義」や「徳」や「賢」に相当するような、しかしそれらとはちがった、日本人の抽象概念が日本人の生活のなかからうまれ、またそれらをさすことばがうまれていたであろうが、その可能性が断たれたのである（概念だけがあつてことばがないということはない。その逆もない。概念が生ずることはそれをさすことばができるということであり、ことばができるのは概念がうまれたということである。）』

漢語は原則すべての単語が一音節で、一つの文字で書かれる「一語・一文字・一音節」の言葉である。

また、日本語にも英語にもない「声調」があり、すべての音節に音の高低の変化がある。声調には4種類のアクセントがあり、声調の違いで単語の意味が変わる。つまり、すべての音節（言葉）がそれぞれの音調を持つことが漢語の特徴である。

漢語の単語は原則一音節といっても、人が口から発することのできる音の種類は限られ、音節の数は千五百ほどしかないのに、単語の数は何万とあるので同音異義語は多く存在する。漢語のもう一つの特徴は、非常に多くのことばが二つの単語の組み合わせでできていることである。「負担」（「負」は背中に持つ「担」は肩に持つ）のように、同じような意味の単語を組み合わせたものが多くある。しかし、それら一つ一つが意味を持っている言葉が組み合わせさってできた言葉であり、複合語といった方がふさわしい。単語はすべて一音節なのだが「安定」「幸福」「闘争」「山岳」「道路」「樹木」「尊敬」……な

ど、二つ集まって二音節のことばとなって安定する。高島氏は、一語でも意味が分かるのに、わざわざ同じような意味の単語を覚える必要があるのが、日本人にとっては余計な労力であると主張する。

日本は、日本語とあまりにも異なる漢語を取り入れてしまったために、日本語を漢字で書くということに非常な困難と混乱が伴った。それは千数百年経った今日もまだ続いているのである。

まるで氏素性の違う漢語という、よその言語から文字を借りてきて、日本語の中で使っているのだからとても難しい。それと日本人は口が不器用なので、もともと一音節の単語が複数音節になってしまう。

英語を例にとれば、本来一音節の「spring」を日本人は「su pu ri n gu」と五音節に発音してしまう。

日本語は開音節構造（母音で終わる音節のこと、閉音節は子音で終わる音節をいう）の言葉なので、すべての音節が母音で終わる。しかもその母音の前につく子音は一つだけで、日本人が口から出せるのはごく簡単な音だけ、しかもその音の種類がとても少ない。

例えば英語では「ア」に近い音だけでも[a, æ, ʌ, ə]と4つあり、多くの日本人は発音に苦労する。

a : 「オ」の口で「ア」と発音[wash]

æ : 「ア」の口のまま「エ」と発音[cat]

ʌ : 軽く口を開いて喉の奥の方で短めに発音、日本語の「ア」に近い[sun]

ə : リラックスした状態で「ア」と軽く発音[about]

また、漢語でいえば単母音は[a, o, e, i, u, ü]と6つ、二重母音を含めると30以上ある。例えば「a」という1つの音に対して4通りの上げ下げがあるなど、その発音の複雑さは中国語を聴いたことがある人であれば思い当たるだろう。

漢字が日本に入ってきてから数百年の間に、日本語を書きあらわす文字として使うためにいくつかの加工が行われた。その一つが、漢字をその意味によって直接日本語で読むことにした訓読みである。

例えば「山」という字、これを音でサン（あるいはセン）と読んでいたのを、この文字のさすものは日本語の「やま」に相当することが明らかであるから、この「山」という漢字を直接「やま」と読むことにしたのである。これは相当奇抜なことで一大飛躍だった。これが訓読みである。

そうしたことの結果として、多分最も訓読みが多いのは「生」で【うむ、うまれる、いきる、はえる、おい、なす、ある、き、ふ、なま、うぶ】など十種類以上の訓読みが存在する。「生」(sheng) という漢語は一つなのに、訓読みの多さは日本語をととても難しくしている。

『よくわたしにこういう質問の手紙をよこす人がある。----「とる」という語には、「取る」「採る」「捕る」「執る」「撰る」「撮る」などがあるが、どうつかいわければよいか、教えてください。あるいは、「はかる」には、「計る」「図る」「量る」「測る」などがあるが、どうつかいわけなのか教えてください。』

わたしはこういう手紙を受けとるたびに、強い不快感をおぼえる。こういう手紙をよこす人に嫌悪を感じる。こういう手紙をよこす人は、かならずおろかな人である。おそらく世のなかには、おなじ「とる」でも漢字によって意味がちがうのだから正しくつかいわけねばならない、などと言って、こういう無知な、おろかな人たちをおどかさ人間がいるのだろう。そういう連中こそ、憎むべき、有害な人間である。こういう連中は、たとえばわたしのような知識のある者に対しては、そういうことを言わない。「滋養分をとる」はダメ、「撰る」と書きなさい、などとアホなことを言うてくるやつはいない。ほんとに自分の言っていることに自信があるのなら知識のある者に対してでも言えばよきそうなものだが、

言わない。もっぱら自分より知識のない、智慧のあさい者をつかまえておどす。

「とる」というのは日本語（和語）である。その意味は一つである。日本人が日本語で話をする際に「とる」と言う語は、書く際にもすべて「とる」と書けばよいのである。漢字でかきわけるとは不要であり、ナンセンスである。「はかる」もおなじ。その他の語ももちろんおなじ。』

漢字は長い歳月をかけて日本に入った。その漢字には音と意味が付いているのだから、漢字が入ってきたのは漢語が入ってきたということでもある。日本人はこれを利用し、またこれに加工をほどこした。

まず、漢語をそのまま日本語に混ぜてつけた。次に、漢字に訓をつけた。ついで漢字の字形を簡略化して「かな」をつくった。「かな」は、本の行間に書き込みするところから生まれたもので、自然にできたものである。自分だけにわかればよいので、ごく簡略化して書く。「伊」は左側の「イ」だけ、もしくは右側の「尹」だけを書くというようにすれば、手間もスペースもとらない。こうして「かな」ができ、現在の日本語はおおむね四種の語群よりなっている。

- ① 和語：本来の日本語 ----- おおむね、より、ひとつ、ある など
- ② 字音語：漢語と和製漢語よりなる ----- 現在、種、語群、本来 など（①、②で85%）
- ③ 外来語：漢語を除く外来の言葉 ----- カルタ、タバコ、キセル、合羽 など（10%）
- ④ 混種語：①～③が混じってできたもの ----- 輪ゴム、郵便ポスト、食パン、半袖シャツ など

『江戸時代までの和製漢語を明治以後の和製漢語とくらべると、様相がよほどちがう。

一つは、そのほとんどが、耳で聞いてわかる、ということである。「中間」「成敗」もそうだが、その他、「奉行」「与力」「同心」「家老」「代官」「役人」「番頭」「丁稚」「坊主」「役者」「芸者」「三味線」等々、みな耳で聞いてわかり、まぎらわしいことばがない。明治以後の和製漢語—カガクと言っても「科学」と「化学」とあり、シンリと言っても「真理」と「心理」と「審理」とあり、セイシと言っても「制止」「静止」「製糸」「製紙」等があり、セイカギョウをいとなんでおりますと言っても「製菓業」か「製靴業」か「青果業」か「生花業」かわからないのとくらべれば、「奉行」や「与力」「同心」などの類がいかにすぐれたことばであるかがわかる。

江戸時代以前の和製漢語のもう一つの特徴は、漢字の意味からことばの意味が出てこないということである。言いかえれば、明治以後の和製漢語は、日本語をまったく知らない中国人が見ても文字から意味がおしはかれるが、江戸時代までの和製漢語は、どんなに漢字にくわしい中国人でもまず意味がわからないということだ。たとえば、

「野暮」は野原の日暮ではなく、粹でなく洗練されてないことである

「世話」は世のなかの話ではなく人の面倒を見ること 「心中」は心の中ではなく複数自殺である

「無茶」はお茶がないことではなくデタラメ 「家老」は家の老人ではなく一国一城の宰相である

「同心」は心を同じくすることではなく警察官 「家来」は家へ来ることではなくおつきの配下である

「神妙」はおとなしいことである 「勘当」は道楽むすこを家から追い出すことである

「逐電」は悪事をはたらいて姿をくらますことである 「所帯」は家族、家庭である

「推参」はあつかましいこと 「無下」はあいそのないこと 「扶持」は給料である

「立腹」は怒り 「粗末」は大切にしないことである、その「大切」は無論大きく切ることではない

これらはすべて、漢字の字音でできていることばではあるけれども、漢字で書いてその個々の字をにらんでも語の意味は出てこない。すなわち字の意味にはさほど頓着していないのである。この「頓着」

も和製漢語だが、「頓」と「着」という字を知っているのみの人にはわからない。「大丈夫、あいつはそんなことトンチャクしないよ」と聞けば「頓着」の字を知らない者でも意味はわかる。

つまりこれらのことばの意味は、字からではなく、日本人の生活のなかから出てきている。あるいは、意味は日本人の日々の生活のなかにある。すなわち、江戸時代までの和製漢語（あるいは日本漢語）は健全である。明治の和製漢語がひたすら個々の漢字の意味にたより、それが耳にどうきこえるかを考慮せず、日本人の生活と遊離したところで生産されたのと正反対である。

江戸時代末までの日本人は、和語と、漢語と、和製漢語と、和漢混淆語とをもちいて生活していた。外来語（無論漢語以外の）もすこしはあり、外来語と日本語との混種語もあったがそれはわずかなものである。

こまかくわければ、武士や豪商豪農などの知識階級は日常生活においても漢籍に出てくる漢語をまじえもちいたが、一般民衆は、和語に多少の和製漢語と和漢混淆語がまじるくらいであったろう。と言っても、よほど特殊な学者は別として、ふつうにはことばの素姓などはまったく意識されない。たとえば、「宿場」や「関所」や「茶店」は和漢混淆語で、「街道」や「本陣」や「人足」は和製漢語（あるいは日本漢語）で、「旅籠」や「草鞋」は和語で、「行燈」や「脚絆」は漢語、というようなことを、ふつうの日本人が理解も意識もするはずがない。ことばの素姓というようなことは理解しなかったが（あるいは理解しなかったからこそ）、すべてのことばはそれを表記する漢字があり、また漢字で書くのが正式である、という意識を持っていた。字を知らない人ほどその傾向が強かった（字を知らないというのは無論漢字を知らないということである。「はたご」はわかっても「旅籠」を書けないのを「字を知らない」と言った）。つまり無教育な者ほど、漢字を神聖視し、崇拜した。したがって自分が字を知らないことを恥じた。だから字を書くことをこわがり、いやがった。日本には「かな」という日本語を書くためのりっぱな字がある、なんで外国の文字である漢字をつかわねばならぬのか、かなで十分ではないか、というような気概は、無教育な者には金輪際期待できなかった。

そもそも無教育な人たちは、漢字が外国の文字であることも知らなかったし、だからはじめから日本語を書きあらわすようにはできていないのだということ知らなかった。ただひたすら、漢字こそが本当の文字であると思い（「本字」という呼称も無論庶民層の言いかたである）、字を習うのが学問だと思い、したがって字をたくさん知っている人が学問のある人だと信じていた。これはちょうどこんにち、英語のできない者ほど英語を尊敬し、英語をペラペラしゃべる人間を上等人種だと思うのとおなじである。日本語も英語も言語として同格である、日本人が英語がわからなくてもすこしも恥ではない、とはっきり言うのは、英語のできる人、すくなくとも教育のある人である。

明治以後の英語神聖視、英語崇拜、それとおなじことが、あるいはもっと極端な形で、漢字神聖視、漢字ばかりでできている書物やそういう書物をよむ人間に対する尊敬、崇拜としてあったわけだ。

ことばの素姓という観念があれば、字音語と和漢混淆語は漢字で書かねばならぬが、和語は何も漢字を書く必要はない、かなで書いたほうがよい、という判断もできるのだが、それがわからないから、なんでも漢字で書くのが正式だと思ってしまうのである。「宿場」や「本陣」は漢字で書くべき語だが、「はたご」は和語なのだからかなでよい、かなのほうがよい、と言っても、どこがちがうのかわからないわけだ。』

『漢字や漢文や漢籍をありがたがる必要はすこしもないのだ、という主張は、漢字や漢文や漢籍を非常

によく知っている知識人からしか出てこないのである。明治以後、漢字を多く知る者は漢字を尊重する。漢字を知らない一般民衆は、漢字の削減を、あるいは廃止をもとめる、と言う人がよくあった。しかしこれは観念論である。日本人が、漢字、漢文、漢籍を無上にありがたがるのを、最も強く批判したのは本居宣長である。この人はしばしば、ほとんどかなばかりの文章を書いている。宣長はもとより当時（というのは江戸時代の中期から後期にかけて）の最高の知識人であり、そういう人にしてはじめて、そういう見識と気概を持ち得たのである。』

『わたしはもとより、儒者、漢学者、漢文先生を嫌悪する者であるから、宣長の意図を壮とし、『漢意を去れ』という宣長の主張には双手をあげて賛成する。けれども、よほど程度の低い内容のものを書くのならともかく、宣長のごとく高度な内容のことをのべようとする際には、漢字、漢語ぬきでは、どんなにしても文章は書けぬのである。宣長も勿論、「書」や「地」や、あるいは「学問」や「文字」の使用で、事実上それを承認している。なぜ程度の高いことは日本語ばかりでは言えぬのかといえば、前に言ったように、漢語漢字がはいってきて和語は成長がとまってしまったから、ある程度以上のこと（たとえば「学問」「文字」）は漢語で言うよりほかないのである。』

『しからは白石の文章、あるいは宣長の「秘本玉くしげ」の文章のようなのが当時の標準的な知識人の文章であり、またよい文章とされたのかというとそうではなく、やはり漢字ばかりの文章が標準であり、また評価も高かった。たとえば頼山陽の「日本外史」巻五絵論。

「外史氏曰、余修將門之史 至於平治承久之際、未嘗不舍筆而嘆也。嗚呼、世道之變、名實之不相讐、一至於此歟。古之所謂武臣者勤王云爾、如源氏平氏莫不皆然。平治之後、乘綱維之弛以逞鴟梟之欲、有暴悍無忌者焉、有雄猜匪測者焉、雖所爲不同、而其蔑王憲、螢私利一耳」

これは何であるか。見たところは漢文である。つまり一応は外国語の文章である。ではその本国人によんでもらうつもりなのかといえば、無論そうではない。本国人によませるつもりなんかはじめからないし、その能力もない。読者として想定しているのは日本人だけである。「外史氏曰く、余將門の史を修して平治承久の際に至れば、未だ嘗て筆を合いて嘆ぜざるなきなり。ああ、世道の變、名實の相讐はざる、一に此に至るか…」とよませるつもりであり、当人もそう書いているのである。

ならばなぜそう書かないで、下から上へもどるようなケツタイなよみかたをさせるのかというと、文章に日本のかながまじるのは格が低い、漢字ばかりだと中国の人が書いたのと同じに見えて上等だと思っているのである。文化植民地根性丸出しである。いまの日本人が、どんなにへたくそでもとにかく英語で物を言えば日本語で言うより高級だと思っているのとおなじである。文章で言えば、*I evry morning with friends to school go.* というような「英文」を書いて、とにかく全部英語だ、日本人がよむのだからこれでいいんだ、とすましているようなものである。いや、いまの日本人はこの *I evry morning* ……を一応は「アイエブリーモーニングウィズフレンズ…」と日本なまりながら英語でよむだろうが、頼山陽流つまり漢学者流のはこれを「ぼく毎朝友だちと学校へ行く」と日本語でよむのである。日本語でよむのなら日本語で書けばよさそうなものだが、日本語はカッコわるい、と思っているのである。そんなに日本語がカッコわるいなら自分の書いたものを漢語でよめるのかというと、よめないのである。evry も morning もどうよむのかわからないで、なんでも *evry morning* というのは毎朝ということだ、と心得ているだけなのである。

徳富蘇峰が頼山陽の文章を“完全に日本化された漢文だ”と言ってほめたそうだが、そんなことがほめたことになるのかねえ。I evry morning……を“完全に日本化された英文だ”とほめる人がいるものだろうか。いや小生、もっと本国人が書いたものかと思まごうような漢文を書け、と言っているんじゃないよ。日本語しか知らない日本人には、日本語の文章しか書けないはずだ、と言っているのである。

なお、みなさんも文化植民地根性の遺伝子を持つ日本人だから、頼山陽の文章を見て、わあスゲエなあ、カツコいいなあ、と思うかもしれないが、それは英語を知らない田舎の爺さんがさっきの I evry morning…を見て、うわあおったまげた、全部英語じゃあ、日本の字が一つもない、と感心するのとおなじである。頼山陽の文章なんぞは滑稽なだけである。

頼山陽流の卑屈さとくらべると、新井白石や本居宣長がりっぱであったことがわかるのである。なお、おことわりしておきますが、頼山陽の文章、多分こうよませるつもりなんだろうと「外史氏日く、余将門の史を修して……」云々と書いておいたが、あっているかどうか知らないよ。小生はこういうものを腹の底から嫌悪し唾棄する者であるから、あつていようと少々ちがつていようと知ったことじゃない。小生は、漢文の形をしたものは漢文として、つまり支那文としてよんで、浅薄かつ滑稽、と言うだけである。』

『そういうふうにして、書物—もちろんそれはむかしの中国人がつくった、漢字ばかりの書物—崇拝、したがって漢字崇拝の気分が、ひろくふかくゆきわたっていて、それが明治以後の、西洋崇拝、西洋語崇拝の素地をなしたのだった。それは、よその国の人たちがつくったものを尊敬する、つまり真理は外からくる、という点でおなじことだったのである。なおついでに、本居宣長のような人はそれに疑いをいだいて、漢籍、漢意を排斥したのだが、それにかわるものが必要になって、そこで日本の神代を絶対的に信じ、崇拝したのだった。それは、「完璧な世が過去にあった」とし、「それは書物に書かれてわれわれにのこされている」とし、「したがってそのたつとい書物を信じて学ぶのが学問である」とする点で、支那人（および支那思想を信仰する日本人）とおなじことだった。それもまさしく、宣長が攻撃する「漢意」なのである。

そしてまた、福沢諭吉のような人も、「聖人の書」や「神代」のかわりに「西洋」をおしいただく知識界のリーダーとして登場したのであって、おしいただくものは新しいが、型としては従来とそうちがいはしなかったのである。』

江戸時代までは、漢字の用法はほぼ安定しており、一般に用いられる語彙にそれほど増減はなかった。しかし、明治維新以降二つの正反対な動きが始まり混乱と紛糾が生じた。

一つは漢字の大量使用で、音を無視し文字の持つ意味だけを用いた、聴いただけでは意味が確定しない言葉が次々に作られたこと。もう一つは、日本の文字を音標化、つまりすべて「かな」や「ローマ字」で書きあらわし漢字を廃止しようとする動きである。いずれも、日本を全面的に西洋化しようという明治維新によるものだ。日本は西洋のありとあらゆるものを取り入れた。政治のしくみ、法律と裁判、各種産業、建築や交通機関、通信手段、学校と教育、学問芸術、軍隊警察、衣服や食品等の生活用品、運動や遊びまで。

日本人はこれらをことごとく日本語に訳し、数千数万語にのぼる和製漢語がつくられた。

このことは、日本人の音声に対する軽視、ないし無頓着をもたらした文字に対する重視をいっそう強め

た。電線が伝染と同じではまずいじゃないか、と言う人に会ったことがない。明治以後の日本人にとっては、「字が違うことばは別のことば」なのである。もともと漢語というものが、そんなふうにもやみに同音の語ができてしまう言語なのではない。ちなみに、漢語では「電線」は diànxian、「伝染」は chuánrǎn、まったく別の音である。この語だけを単独に聞いてもだれにもわかる。

日本では、「電線」と「伝染」とが同じであることを気にする者はだれもいない。勿論電線と伝染だけではなく、電燈と伝統、電気と伝記、電化と殿下を気にする者もいない。なぜ気にしないのか？それは字がちがうからであり、字が違えば別のことばだというのが日本人の考えなのである。ふしぎなことに、音が同じでも字が違えば聞いてわかるのである。字がちがうというのは視覚の問題、聞いてわかるというのは聴覚の問題だが、なぜ耳で視覚をとらえられるのか不思議だ。

ただし、すべての同音語をただしく聞き分けられるわけではない。瞬時に文字を思いうかべて相手の発言を正確に受け取る、その最大のヒントになるのは、その語の出る文脈や状況であるから、おなじ範疇に属しおなじ状況で出てくる、きわめて近い関係にある同音語の場合は、聞きわけはしばしば不可能である。しかしそういう場合には、発音者もそのことを先刻承知なので、必要に応じてちょっと言いかえてみたり、簡単な注釈を加えたりする。これもおおむね慣例ができており、たとえば「ワタクシリツ（私立）の学校」と「イチリツ（市立）の学校」、「モジテン（字典）」と「コトバテン（辞典）」と「コトテン（事典）」など。

おもしろいのは、日本人がこういう言い換えや注釈つけをめんどうがらず、むしろたのしげにやっていることさえあることだ。まぎらわしいし、誤解のもとだからこういうことばは廃止しようと言う人はめったにいない。むしろ、わざわざまぎらわしい同音の語をあらたにつくる。「字典」「辞典」があるところへもう一つ「事典」をつくる。

『言語学の教えをまつまでもなく、本来、ことばとは人が口に発し耳で聞くものである。すなわち、言語の実体は音声である。しかるに日本語においては、文字が言語の実体であり、耳がとらえた音声をいづれかの文字に結びつけると意味が確定しない……コーコーという音は「高校」あるいは「孝行」という文字に結びつけてはじめて意味が確定する……のであるから、日本語は「顛倒した言語」であると言わねばならない。世界数千種の言語のなかで、日本語は比較的やさしい言語か、むずかしいほうか、また、ごくふつうの言語か特殊な言語か、ということがよく言われる。この「顛倒した言語」であるという点では、たしかに特殊な言語であろうと思う。

無論、ずっとそうであったのではない。江戸時代の人たちが、「バントさん」「ゴシンズさん」あるいは「ゴフク屋」「デッチボーコー」などと言う時、それが、「番頭」「御新造」「呉服」「丁稚奉公」などの文字を参照しなければ意味が確定しないものであったはずがない。顛倒した言語になったのは明治以後である。

言うまでもなく、文字がことばの実体であるというのは、日本語のなかの字音語（漢語と和製漢語からなる言葉）についてのことである。ただ、明治以後の日本では、社会のあらゆる方面が西洋化し、主要なことばはほとんどこれらの字音語がしめることになったために、顛倒がつねにあらわれることになったのである。そして、何より重要なことは、日本人がそのことをすこしも意識していない、ということだ。だから、明治以後の日本人の言語生活のなかで漢字がどんなに重要な役割をはたしているかにも気づかない。政府や知識人がくりかえし漢字の削減、ないし全廃を主張してきたのもそのゆえである。

いかに重要な役割をはたしているかに気づいていないから「こんな時代おくれのものはなくしてしましましょう」と気軽にいえるわけだ。』

西洋はあらゆる面で日本より進んでいる、そんな西洋に何とかして追いつかなければならないと明治の人々は考えた。この“進んでいる”とか“遅れている”といった考え方そのものも西洋のもので、日本人は進歩という考え方を西洋人から学んだのである。

明治のはじめころの人々が読んだ「バーレー万国史」は、地球上の人類を4つのグレードに分けている。

- ① 野蛮人 (savages) ; 泥と木で建てた家に住み、弓矢で狩をして生活している。アメリカインディアン、アフリカの黒人の一部、アジアの住民の一部、オセアニア人の大部分
- ② 未開人 (barbarians) ; 一部分石と泥を使った家に住む。ほとんど書物を持たず、教会も集会所もなく、偶像を崇拜している。アフリカの黒人の大部分、アジアの多くの種族、彼らの習俗はしばしば非常に残忍である。
- ③ 半文明人 ; 住民はまあまあの家に住み金持は豪壮な宮殿に住む。人々は多くの精巧な技術を持つが、学校は貧弱で、ごく一部の者が読み書きを教えられる。支那人、インド人、トルコ人その他いくらかのアジアの種族、それにアフリカとヨーロッパの住民の一部
- ④ 最高の文明人 ; よい家に住み、よい家具、多くの書物、よい学校、教会、集会所、蒸汽船、鉄道、電信を持つ。ヨーロッパの多くの部分、およびアメリカ合衆国の人たち

日本人はこの中のグレード③に含まれているらしい。

西洋人は、確かに体力は強く知力も高く、芸術的感性にもすぐれ、何ごとにも積極的な性質を持った優秀な人種である。しかしまた彼らは、自分たちが石の家に住んでいるから、泥の家や木の家より石の家のほうが“進んでいる”と思い、自分たちが教会と集会所を持っているから、教会と集会所を持つ者が“進んでいる”と思い、自分たちがキリスト教を信じているから、キリスト教を信ずる者が“進んでいる”と考える、いたって簡単な精神の持主である。だから人類の歴史を一本道のようにしか捉えられないのである。

実は、人類諸種族の生活というのは、みなそれぞれの環境条件に応じ、またそれぞれの種族の性格に応じて異なっている。それぞれの環境条件があり種族の性質があつての相違なのだから優劣ではないのに、一本道思想だから、自分たちと違うのは自分たちより劣っていると思うのである。一番迷惑なのは、自分たちの神さまが唯一の本当の神さまだと思って、世界中に自分たちの神さまを押しつけてまわることだ。

世界中に出かけて行って、教会や学校や病院をつくらせる。自分たちの政治のやりかたや経済のやりかたをまねさせる。自分たちの音楽やダンスをやらせる。自分たちの社交法や男女関係や教育を教える。はては、世界中いたるところに自分たちと同じような国家をつくらせる。「国」なんてものは、それが合うところも合わないところもあるのに、地球上いたるところ全部国だらけにして、それでもう世界をグジャグジャにってしまった。

そして困ったことに、この自信たっぷり押しつけがましい西洋人を、全面的に尊敬し模倣したのが日本人である。ある面では西洋人以上に西洋人である。そして、西洋人と一緒になって、彼らがサヴェッジズとかバーバリアンズとか呼んでいる人々を、自分らよりもっと遅れているとみなした。彼らには彼らのやりかたがあり、西洋人や我々のやりかたと違っていても、それは“遅れている”のであって“劣

っている”のではない、などとは思わなかった。西洋人以上の洋化主義者、西洋人以上のおせっかい屋になった。この一本道歴史観と進歩という考え方は一体であり、「歴史」も「進歩」も明治の初めに日本人が西洋人から学んだものなのである。

こうして日本は、政治、経済、産業、交通はもとより、学問、芸術、教育もあらゆる事物に“西洋”を取り入れ始めた。そして、そのあらゆる事物に深くかかわる最重要なものは『ことば』すなわち言語である。

いかなる法律も制度も学問も技術も、我々は言葉を媒介にして学ぶのであるから、遅れた言語である日本語を全面的に変えなければならないという考え方が生まれた。

こういった背景から出てきたのが言語改革論であり、一つは「日本語を捨てる」もう一つは「漢字を捨てる」というものだ。

### 「日本語を捨てる」

当時の文部大臣 森有礼は、日本語を捨て英語を日本語にしようと強く主張。森は、米国の学者ホイットニーに宛てた手紙に「わが国の最も教育ある人々および最も深く思索する人々は、音標文字 phonetic alphabet に対するあこがれを持ち、ヨーロッパ語のどれかを将来の日本語として採用するの  
でなければ、世界の先進国と足並をそろえて進んでゆくことは不可能だと考えている」と述べている。

これは当時日本の知識層の考え方であった。これに対してホイットニーは、言語はその種族の魂と直接に結びついたものであるから、そう安易に放棄するなどと言ってはならない、と森に忠告した。

森はまた、言語だけでなく人種も変えるべきであるとなえ、日本の優秀な青年たちはアメリカへ行って、アメリカ女性と結婚してつれ帰り、体質・頭脳ともに優秀な後代を生まれよとすすめた。

森は若いころからヨーロッパに留学し、西洋人をよく知っていた人である。日本人は西洋人のようにならなければだめと本気で考えれば、体質改良、言語変革を考えるのはむしろ当然であったろう。

森有礼にせよ、高田早苗（早稲田大学総長、文部大臣などを歴任）などにせよ、英語を日本の国語にすることをとなえた人たちはみな、日常の会話はともかくも、すこし筋道立ったことを話す際、特に文章を書く際には、日本語よりも英語の方が容易であった人たちである。明治の前半ごろに教育を受けた人たちは、日本語の文章を書く訓練を受けたことはなく、もっぱら西洋人の教師から西洋語の文章を書く訓練をきびしく受けたのであるから、日本語の文章は書けないが、英語やフランス語なら自由に書ける、というのはごくふつうのことであった。その点、昭和の敗戦後に、フランス語を国語にするのがよいと言った志賀直哉などとは選を異にする。なお、明治前半ごろまでの日本語の文章というのは、それを書くのに特別の訓練を要するものであった。今日の日本人が書くような、だらだらした口語体の文章というのはまだなかった。文章は、話しことばとは別のものだったのである。

### 「漢字を捨てる」

西洋の言語と日本の言語との最も大きな違いは、西洋では音標文字を用いているのに対して日本では漢字を用いていることである。音標文字とは、意味にかかわらず音のみを記す文字で、その代表格はアルファベットである。進んだ言語は音標文字を用いているということから、日本語も音標文字を採用して進んだ言語に脱皮しなければならないと主張した。西洋の言語と日本の言語、と言いながら文字のことばかり気にするのは奇妙だが、従来日本の知識人は、書物を通じて異文化を取り入れてきたので、文字がことばであると思っていたのである。

実は、中国も日本よりやや遅れて音標文字化を国の方針にしている。漢字は漢語を表記するために生まれた文字なのだから、漢語には漢字が最も合っているはずである。しかし中国人は、人類の文字は象形文字から音標文字へと進む、それが文字の進歩であると考えた。なぜなら、西洋で音標文字を使っているからである。魯迅が「漢字が減びなければ中国が減びる」と言ったように、漢字は進歩の足かせと見られていた。

本家本元でさえ漢字を捨てようというのだから、日本人が捨てようというのも不思議ではない。もともと漢字は借りものであり、日本語と合わなくて苦労しているのだから当然だ。

軽快で能率的な音標文字「アルファベット」に対して、遅れた鈍重な象形文字「漢字」というのが当時の見方だった。当時の人たちは、日本人にせよ中国人にせよ、言語というものを甘く見ていたのである。

『実は言語というのは、その言語を話す種族の、世界の切りとりかたの体系である。だから話すことばによって世界のありようが異なる。言語は思想そのものなのだ。』

たとえば、*brother-sister* にあたることばは日本語にはない。そう言うとみなさん、「兄弟」「姉妹」ということばがあるじゃないか、と言うかもしれない。でもね、英米人はたとえば *I have two sisters*. というふうに言うけれど、日本人が「わたし姉妹が二人あります」と言うことは決してないでしょう？「姉が二人あります」とか「姉が一人、妹が一人あります」とか言う。

つまり、*brother* とか *sister* とかいうのは、自分の兄弟について、男女の別ははっきり区別するけれども、自分より上か下かは区別せず、ひっくるめてとらえるのとらえかただ。対して日本語は、「上か下か」をわけてとらえる。そういうとらえかたしかない。ところが英語には、日本語の「にいさん」「ねえさん」「兄」「姉」「弟」「妹」にあたる単語はない（辞書には *elder brother* とか *younger sister* とかの語が出てはいるけれども、それは複合語であるし、実際に英米人が *I have an elder brother and two younger brothers*. なんて言いもしない）。つまり、日本語と英語では「世界のとらえかた」がちがうわけなのだ。ところが当時の人たちには、言語がそういう、それぞれの種族のものと考えかた、世界のとらえかたにかかわる重いものだということがわからなかった。それを知るための条件がなかった。世界の種々の言語をよく知ればおのずとわかってくるのだが、自分たちの言語だけしか知らず、そこへ急に規模雄大できらびやかな西洋文明を見て、目がくらんだ。だからかんたんに、言語改革、というようなことを言い出すことができたのである。』

『音標文字化すれば、以後の日本人は、それまでの日本人が書きのこしてきたものをよめなくなるが、明治のなかばごろまでは、そのことを考慮した者はほとんどなかった。明治初めごろの日本人は、それまでの日本のいっさいを、何の価値のないものと思っていた。かえって日本へ来た西洋人のほうが、そんなにかんたんにいっさいの過去を捨ててしまっていていいのかと心配したくらいである。』

たとえば「ベルツの日記」明治九年十月二十五日の条にはこうある。

……ところが —なんと不思議なことには— 現代の日本人は自分自身の過去については、もう何も知りたくないのです。それどころか、教養ある人たちはそれを恥じてさえいます。「いや、何もかもすっかり野蛮なものでした（言葉そのまま!）」とわたしに言明したものがあるかと思うと、またあるものは、わたしが日本の歴史について質問したとき、きっぱりと「われわれには歴史はありません、われわれの

歴史は今からやっと始まるのです」と断言しました。これら新日本の人々にとっては常に、自己の古い文化の真に合理的なものよりも、どんなに不合理でも新しい制度をほめてもらう方が、はるかに大きい関心事なのです。(菅沼竜太郎訳)

「新日本」ということばがしばしばとなえられた。日本は白紙状態で新しく建国にのりだすのだというの多くの人の考えであった。したがって、これまでの日本人の書きのこしたものを、これからの日本人がよめなくなっても、それはさしつかえないのである。どっちにしてももう用はないのであるから。

言語は新日本建設の道具であり、したがってこれをわかりやすく能率的なものにするのがよいのである。日本の言語は、これからの日本人が、過去の日本人と語りあうための道具でもあるのだ、とはだれも考えなかった。そう、これとおなじことが、約八十年後、昭和敗戦後の日本でもう一度おこるのである。淡泊で、腰が軽く、変り身のはやい点において、日本人は、世界の諸種族のなかでもおそらく最右翼にあると言ってよいと思われる。』

国語改革論議は盛んに行われたが、音標文字化はほとんど進まなかった。たくさんの漢字語が新たに造られ、確実に西洋化しつつある日本人の生活の全局面で漢字なしには進まなくなっており、漢字の廃止はもはや不可能であることが明らかだった。何度も国語改革案が建議されたが、案が公表されるたびに激しい反対議論が起こり実施に移されることはなかった。

そんな状況の中、昭和20年の敗戦は、これまでの日本はすべてが間違っていたという考えを起こさせた。日本は一切を変えて、もう一度白紙から出なおすのだという論調が全国に広まった。戦争に敗れたのは、軍事力、経済力の敗北であったのみでなく、文化の敗北なのだと言者たちは言った。煎じ詰めれば言語と文字が劣っていたというのである。

『敗戦の三か月後、昭和二十年十一月十二日の読売新聞（当時の紙名は「讀賣報知」）社説が「漢字を廢止せよ」と題して次のごとく論じたのは当時の気分を代表するものである。

「漢字を廢止するとき、われわれの腦中に存する封建意識の掃蕩が促進され、あてきばきしたアメリカ式能率にはじめて追隨しうるのである。文化國家の建設も民主政治の確立も漢字の廢止と簡単な音標文字（ローマ字）の採用に基づく國民知的水準の昂揚によって促進されねばならぬ。」

当時の読売新聞が極端な進歩主義の立場をとっていたことは『読売新聞百年史』に「左傾紙面」と題してくわしく記述してある。いま読売新聞の題号が横書きであるのはその時のなごりである。「横書き題字は独創的だったが、これは、当時、日本語のローマ字化論まででいていたところで、多分にこうした風潮に影響されたものだった。題号にとどまらず本文まで横組みにしてみよう、との案もあったが、これは実現しなかった。横書き題字は、GHQも推奨し、いわば日本語改革の一端を示す意味があった」とある。昭和二十一年四月、志賀直哉が「改造」に「国語問題」を發表してフランス語を国語にしてはどうかと提唱したことはよく知られる。志賀は、日本の国語ほど不完全で不便なものはない、これを解決せねば日本はほんとうの文化国にはなれない、とのべてこう書いている。

「私は六十年前、森有禮が英語を國語に採用しようとした事を此戦争中、度々想起した。若しそれが實現してゐたら、どうであつたらうと考へた。日本の文化が今よりも遙かに進んでゐたらう事は想像出来る。そして、恐らく今度のやうな戦争は起つてゐなかつたらうと思つた。吾々の學業も、もつと樂に進んでゐたらうし、學校生活も楽しいものに憶ひ返す事が出來たらうと、そんな事まで思つた。

そこで私は此際、日本は思ひ切つて世界中で一番いい言語、一番美しい言語をとつて、その儘、國語

に採用してはどうかと考へてゐる。それにはフランス語が最もいいのではないかと思ふ。六十年前に森有禮が考へた事を今こそ實現してはどんなものであらう。不徹底な改革よりもこれは間違ひのない事である。森有禮の時代には實現は困難であつたらうが、今ならば、實現出来ない事ではない。」

意見としてはばかばかしい、あるいはたわいないものだが、これも当時の日本の一般的な気分を知るにはよい材料である。昭和二十一年三月にアメリカから教育使節団が来て日本政府に、漢字を廃止してローマ字を採用せよ、と勧告した。もっとも使節団は最初からそういう勧告をたずさえて来日したのではなく、彼らに接触した文部省の国語官僚や新聞の代表が使節団にうたててそういう勧告を出してもらつたのであるらしい。日本の主要な都市はすべて焼かれて、かつて文部省に反対した知識人たちの多くはそれぞれ地方にのがれて孤立していた。いまや文部省に反対するまとまった勢力はどこにもなかつた。』

戦後のどさくさに紛れて国語改革を行おうという動きが活発化した。

昭和21年以降、当用漢字、当用漢字別表、当用漢字音訓表、当用漢字字体表の制定により教育漢字（教科書に出てくる漢字）が定められた。当用漢字はきわめて前向きなものだったが、日本人がこれからの生活や思想を文章に書く、ということだけを前提としたものであり背後のことは考えていない。

例えば、日本はもう軍隊を持たないのであるから、これからの日本人に軍曹や兵曹長などの「曹」の字はもはや不要である、と削除した。しかし実際には、戦後の日本人が、戦争中自分が兵士であった時の経験を書く、あるいは、戦争中の日本社会や軍隊について書くということはある。敗戦後、日本の過去はすべてまちがっていた、、、という気分は、当用漢字表にも色濃く反映していたのである。

戦後の国語改革……かな使いの変更、字体の変更、漢字の制限、がもたらした最も重大な影響は、それ以後の日本人と過去の日本人—その生活や文化や遺産—とのあいだの通路を遮断したところにあつた。それは、必ずしも国語改革にかかわった人たちが意識的にめざしたものではなく、それほど重大なことと考えるはいなかつたが、実際には思いがけなかつたほど強い遮断効果を生んでしまった。

こうした問題に知識人が気付いたのは10年以上経つた後で、時すでに遅かつたのである。憲法や学校制度などは再び変えることはできただろうが、国語改革だけはもはや如何ともしがたい。

“当用漢字”は音標文字化（漢字全廃）という最終目標への一里塚だったが、中途半端な状況でまとも落ち着いてしまい、結局漢字が全廃されることにはならなかつた。

『戦後略字（当用漢字新字体）がおこなわれて五十年以上がすぎた。いまでは、新字体実施以前の書物も、そのほとんどが新字体に変えて刊行されている。古典文学作品や歴史資料もそうである。そのため不都合がおこっている。もともと新字体は、それ以後の人が文章を書く時に依拠すべきものとして制定されたものであつて、それ以前の書物や文書のことは考慮のうちにはいつていない。ところが実際に学校教育が新字体のみでおこなわれると、その教育を受けた人は正体の字がよめない。すくなくともよみにくい。そこで営利を求める出版社は、「若い人たちにすこしでもよみやすいように」などとおためごかしの理由をつけて、過去の書物や文書を新字体に変えて刊行するのがごくふつうのことになつてしまつたのである。

その際最も不都合なのは、二つ（ないしそれ以上）の字をあわせて一つにした文字である。

たとえば、三つ以上の字をあわせて一つにしたものに「弁」がある。「弁」という字はもともとある。そこへ「辨」も「辯」も「瓣」も「辮」も「辦」もみな「弁」にした。つまり古典を新略字になおした

本では、どれもみな「弁」になる。こんにちの生活においてはこれらの字の多くは用がないが、むかしの本では使い分けられている（意味がちがうのだから使い分けてあるのは当然だ）。ところがそれを全部「弁」になおしてしまつては、もとのことばがわからなくなる。

たとえば「弁言」は序文である（「弁」はかんむり）。「辯言」は口達者である。ところがこれも「弁言」に変えてしまうのである。古典文学や歴史資料などを戦後字体に変えて本にするというのがそもそもまちがいのだが、どうしてもやるなら、すくなくともこうした問題にだけでも注意し適切に処理しなければならぬのだが、それをやっていない。』

『こんにちのごとく、多くの人が機械（ワープロ、パソコン、等々）を使って文章を書くようになると、人がどういう字を「書く」かをきめるのはその人の知識でも手でもなく、機械にあらかじめくみこまれている文字である。それを一手ににぎっているのが JIS（日本工業規格）である。たとえば人が“徳川幕府”と書きたいと思つても JIS には「徳」しかないのだから“徳川幕府”でがまんするほかない。“西郷隆盛”と書こうと思つても JIS には「郷」「隆」しかないから「西郷隆盛」と書くほかない。上に言つたごとく、徳、郷、隆は徳、郷、隆に「包摂」されている、と JIS は言うのである。現在の機械の能力をもつてすれば正字を入れることは容易なのだが、JIS はそれを拒否しているのである。

東京大学の坂村健先生が、文字を「どこかでだれかが仕切るというのはよくない」「コンピュータの文字セットを決めているのが工業規格ではあまりではないでしょうか？文化規格なのです。今や工業規格ではないのです」と言つていらつしゃる。まことにそのとおりである。コンピュータの文字に関するかぎり、ガンは JIS である。わたしは以前あるところに JIS 漢字を批判する文章を書いたことがある。そうしたら JIS から長い手紙が来た。その内容は、要するに「JIS の規格票を精読もしないで JIS 漢字に対して批判がましいことを言うな」というのである。「規格票」とは何か伝票かカードみたいな名前だが、いったい何なのだろう？「規格票も精読しないで」と言うからには、見たいと思えばだれでも見られるものかと思つたら、それがそうではなかった。わたしは人にたのんでやつのことでコピーを一部手に入れた。伝票やカードどころか、電話帳のような部厚い大きな本である。無論 JIS が作ったもので、一種の内部文書—すくなくとも一般の人には容易に見る機会も、またその必要もないものである。まさしく「工業規格」で、文字に数字をあてて処理し、管理するための手引書だ。そういう、JIS の人ないし JIS に近いところにいる人（経済産業省の工業規格関係の人など）でもなければ用のないものを、名前だけ持出して「規格票を見もしないで JIS 漢字に対して文句を言うな」と言うのである。「日本の文字はおれたちが仕切るのだ」という傲慢まる出しだ。機械にくみこまれている文字はすべて、その一つ一つに長い数字があたえられており、その数字をつうじて画面上によび出されるようになっているのであるらしい。その数字をにぎっているからこわいもの知らずなのである。しかし、文化としての文字をこんな連中にまかせておいてはならない。だいたい工業技術者であるから、ことばや文字に見識があるわけでも愛情があるわけでもない。工業技術の対象としてしか見ない。拡張新字体をどんどんつくつて番号をあて、正字を抹殺してしまつたのがこの連中である。

文字は過去の日本人と現在の日本人とをつなぐものであるのだが、こうした人たちはそんなことはすこしも意に介しない。いま文字を使う人、それら官庁や会社の実務で使う人のことだけを念頭において文字を管理している。文化資産としての文字を JIS の手から解き放つことが緊急の課題である。』

国語改革は、その出発点からして根本的に間違っていた。音標文字を採用するという基本方針をまとめて出発したことが間違いである、と言語学者の新村博士は主張する。言葉を道具と考え、道具は簡単で便利なものであればよい、という考え方で出発したのだがそうではない。新村博士はくり返し“伝統”という。

この場合の伝統とは「過去と将来を一貫する」「過去の日本人と将来の日本人とを分断しない」という意味である。明治前半に過去の日本をすべて否定し、全面的に西洋化しようとしたこと、そこから国語問題の根本的な間違いが始まっている。しかも当時の人たちは、文字というものを非常に安易に考えていた。

地球上のある種族（例えば日本人）の話す言葉と、その種族に属する人々の物の見かた考えかたとは深い関係がある。国語と国民性の因縁の深さは当然である。それを分かっているながら、言語と文字とのかかわりについては、何ら必然的なものではなく、ごくごく疎なものであると考える傾向があった。西洋の言語学（特に明治の日本人が学んだロマン主義的言語学）は、人類が話す言語は極めて重大視するが、文字についてはこれをただ言語の影とみなして少しも問題にしなかった。ところが日本語においては、その語彙の過半を占める字音語を排除してしまえば、現水準を維持し得ないのである。西洋直輸入の明治の言語学にはそれがわからなかった。だから、文字を簡単に廃止ないし取り替えできるものと考えたのである。漢字を主体とする文体から、“かな”を本位とする文体に変えてゆくのがよい、というのが新村博士の考えである。かなこそ、日本人が作り出した日本の文字であり、当然日本語に最もよくあうものだからである。

**最終章「やっかいな重荷」** 少々長いが全文をここに掲載する。

『西洋の言語学者は、言語は音声であり、文字はそのかげにすぎない、文字は言語にとって本質的なものではない、と言う。これはもちろん正しい。人が口に音声を発し、それを耳に聞いて意味をとらえるのが言語の本質である。』

人類は数万年前から言語をもちいてきた。そのながい歴史のなかで見れば、文字が発明されたのはごく最近のことである。また、地球上のすべての言語が文字を持つわけではない。文字を持つものはむしろ少数である。それら文字をともしなわぬ言語は十分にその役割をはたし、現にはたしつつある。文字なき言語は決して不備な言語ではない。すなわち、文字は言語にとって必然のものではない。

ひとり日本語のみが例外である。その語彙のなかば以上は、文字のうらづけなしには成り立たない。もとより最初からそうであったのではない。漢語伝来以前数千年、あるいはそれ以上にわたって、日本語は、音声のみをもってその機能を十全にはたしていたはずである。文字のうらづけなしに成り立たなくなったのは、千数百年前に漢語とその文字がはいつてからのち、特に、明治維新以後西洋の事物や観念を和製漢語に訳してとりいれ、これらの語が日本人の生活と思想の中核部分をしめるようになって以来である。

現代の日本においては、ごく身近で具体的な物や、動作や形容には、本来の日本語（和語）がもちいられる（みちをあるく、やまはたかい、めをつぶる、いぬがほえる、あたまがいたい、ほしがでた、あめがふる、ゆきはつめたい、……）。これらはもちろん音声が意味をになっている。耳できいてわかる。文字のなかだちを必要としない。

しかし、やや高級な概念や明治以後の新事物には漢語がもちいられる（この数段に出てきた語をあげるならば、例外、語彙、文字、最初、漢語、伝来、以前、音声、機能、十全、維新、西洋、事物、観念、和製、生活、思想、中枢、部分、以来、現代、具体的、動作、形容、本来、高級、概念、以後等々）。

これらの語も無論音声を持っている。けれどもその音声は、文字をさししめす符牒であるにすぎない。語の意味は、さししめされた文字がになっている。

たとえば「西洋」を、ひとしくセーヨーの音を持つ「静養」からわかつものは「西洋」の文字である。日本人の話（特にやや知的な内容の話）は、音声を手がかりに頭のなかにある文字をすばやく参照する、というプロセスをくりかえしながら進行する。くりかえしのべてきたごとく、もとの漢語がそういう言語なのではない。漢語においては、個々の音が意味を持っている。それを日本語のなかへとりいれると、もはやそれらの音自体（セーとかケーとか、あるいはコーとかヨーとかの音自体）は何ら意味を持たず、いずれかの文字をさししめす付牒にすぎなくなるのである。

しかも日本語は音韻組織がかんたんであるため、漢語のことなる音が日本語ではおなじ音になり、したがって一つの音がさししめす文字が多くなる（たとえば日本語でショーの音を持つ字「小、少、庄、尚、昇、松、将、消、笑、唱、商、勝、焦、焼、証、象、照、詳、章、伯、掌、紹、訟、奨」等々）。

これらは漢語ではみなことなる音であり、音自体が意味をになっている。これらが日本語ではすべて「ショー」になるので、日本語の「ショー」はもはや特定の意味をつたえ得ない。一つの語は通常二つの音（字音）のくみあわせでできているが、音の種類がすくないためにくみあわせの数がかぎられており、したがってそうやってできた語はほとんどのものが同音の語を持つことになり、その辨別は文字の参照にたよるほかないのである（たとえば、力行とサ行のオ列長音という、せまいくみあわせだけをとってみても、キョーコー、キョーショー、キョーソー、コーキョー、コーコー、コーショー、コーソー、ショーキョー、ショーコー、ショーショー、ショーソー、ソーキョー、ソーコー、ソーショー、ソーソーなどがあり、コーソーには高層、構想、抗争、後送、広壮などが、ソーコーには壮行、奏効、操行、草稿、装甲などがある。他も同様）。

日本の言語学者はよく、日本語はなんら特殊な言語ではない、ごくありふれた言語である、日本語に似た言語は地球上にいくらかもある、と言う。しかしそれは、名詞の単数複数の別をしめさないとか、賓語（目的語）のあとに動詞が位置するとかいった、語法上のことがらである。かれらは西洋でうまれた言語学の方法で日本語を分析するから、当然文字には着目しない。言語学が着目するのは音韻と語法と意味である。

しかし、音声が無力であるために、ことばが文字のうらづけをまたなければ意味を持ち得ない、という点に着目すれば、日本語は、世界でおそらくただ一つの、きわめて特殊な言語である。

音声の意味をにない得ない、というのは、もちろん、言語として健全なすがたではない。日本語は畸型的な言語である、と言わざるを得ない。

では、日本語は健全なすがたにかわり得るのであろうか。

日本語は畸型のままで成熟してしまった言語であるから、それは不可能である、とわたしは考える。

これをいって完全に正常なからだにしようとするれば、日本語はきわめて幼稚なものになってしまう。ある程度正常にしようとするれば、その分だけ幼稚になる。それはこういうことだ。

現在でも、ごく少数ではあるが、完全音標化を主張する人はあって、かなやローマ字で文章を書き、このとおり十分につうじるではないか、と言っている。しかしそれは、口頭の話とおなじことで、文章

を書く人もそれをよむ人も、無意識裡に漢字を参照しているからつうずるのである。

たとえば、「ふるいでんとうのあるがっこうにはいった」がつうじるのは、よむ者が頭のなかで「伝統」を参照しているからであって、完全音標化すれば漢字はなくなり、いずれはだれも知らなくなるのであるから、「ふるい電燈」との区別を保証するものはなにもない。日常生活上「デントー」は「電燈」のための音声としてのこるに相違ないから、「伝統」という語と概念は消えるほかない。同様に「カテー」は「家庭」の意の音声となり、「假定」や「過程」は消え去らざるを得ない。コーソーもソーコーもキョーコーもコーキョーも、最もポピュラーな一つだけをのこしてあとはなくなる。「コーソーのケンチク」がのこれば「コーソーなやしき」や「ロンブンのコーソー」は意をつうじがたくなり消滅する。きわめて幼稚なものになる、というのはそういうことである。

日本語、というこの畸型の成人を、正常なからだにするために、政府の執刀で手術をほどこそうとしたのが、明治初年以来の音標文字化運動であった。この手術によって、日本語は西洋諸語とおなじように、音声と言語の主体で、文字（かな、もしくはローマ字）は単なるそのかげにすぎないような、そういう言語に生まれかわる、と当時の人たちは考えた。ただし、一気にやるのは無理らしいことがだんだんわかってきたので、段階的にやることにし、その第一段階の大手術が、戦後の国語改革であった。これによって、この成人のすがたが西洋諸語にちかいものになったかどうかは疑問だが、力がおち、幼稚になったことはまちがいない。

音標化運動はそこで停止したままである。これ以上手術をくりかえして当初の目標をめざすのは不適當、むしろ危険であり、反対の声もつよいから、政府もためらっているうちに、運動をひっぱってきた単純で楽天的な音標文字主義者たちはみな死んでしまった。文部省と国語審議会は音標化運動の司令部ではなくなった。さりとてあの戦後の大手術の非をみとめようとは決してしないが。

漢字は、日本語にとってやっかいな重荷である。それも、からだに癒着してしまった重荷である。もともと日本語の体質にはあわないのだから、いつまでたってもしっくりしない。

しかし、この重荷を切除すれば日本語は幼児化する。へたをすれば死ぬ。

この、からだに癒着した重荷は、日本語に害をなすこと多かったが、しかし日本語は、これなしにはやってゆけないこともたしかである。腐れ縁である。この「腐れ縁」ということばは、「くされ」が和語、「縁」が漢語で、これがくっついて一語になっている。日本語全体がちょうどこの「腐れ縁」ということばのように、和語と漢語との混合でできていて、その関係はまさしく「腐れ縁」なのである。日本語は、畸型のまま生きてゆくよりほか生存の方法はない、というのがわたしの考えである。』

『漢字と日本人』を読み、自分が今まで感じていたことをすべて言ってくれたような気がして、そうだ！その通りだ！と思いながら読んだ。そして、多くの人に知ってもらいたいと思い、まとめたのがこの小文である。

“言葉がない”ということは“概念がない”ということで、未発達な民族の言葉には高度な抽象概念を表す言葉はない。従って、高等教育は先進国の言語でしか学ぶことはできないのである。

もし日本に漢語の導入がなく、日本語が独自に発展したとしたらどんな言葉になっていたのだろう？とても興味がある。それは、日本人が本来持っている、日本人の本質を的確に表す言葉になっていただろうと思う。より母音の数や声調の抑揚が多い言葉になっていたかもしれない。

この最終章を見ると、とても平仮名が多いことに気付くだろう。著者はこのように“かな”主体の日

本語に改めるべきだという主張から、このように書いているのだと思う。もともと日本で作られた「和語」は、わざわざ漢字で書く必要のないことばなのだ。

漢字の読み書きに慣れてしまった我々には、平仮名の多い文章はむしろ読みにくいし、何より子供が書いた幼稚な文に見えてしまう。しかし、子供の書く平仮名ばかりの文は、漢字を使わなくとも意味が通じる本来の日本語で、子供にわかるものだ。大きくなれば、音声から頭のなかにある漢字の単語を、すばやく当てはめることができるようになるので、何ら問題なく意味が把握できるようになるが、子供には難しい。もし、日本語が違う発達をした言葉で、このような熟練の必要がないものだったとしたらどうだろう？それほど単純ではないだろうが、より早い時期に高いレベルの教育を受けることが可能になっていたかもしれない。

中国語の母音に4つの上げ下げの声調が存在するのは、こうした同音異義語を避けるためのものだったとは考えられないだろうか。地理的には近いのに、中国と日本は言葉の違いが際立っていることをみると、全く異質の特徴を持つ民族だということが考えられる。

外国人にとって日本語、特に漢字の難しさは、話し言葉と書き言葉のこうした複雑さにあると思う。

“言葉と人”との関係を考えるとき、(西洋)先進国により植民地支配された多くの人々が、自ら持っていた言語、伝統的慣習あるいは社会組織などの文化的特徴を、自らの意思に関係なく放棄されられたことは、それぞれの民族のアイデンティティーを剥奪されたのと同じことで、どんなにか酷いことだったろう。自らの言葉でなく、他国の言葉で考えなければならぬとは、一体どういうことなのだろうか？ (2020.01.27)